

若松賤子の翻訳の細緻性

— *Sara Crewe, or What Happened at Miss Minchin's* と
「セイラ、クルーの話。一名、ミンチン女塾の出来事。」—

鈴木 宏枝

はじめに

フランシス・ホジソン・バーネット ([Frances Hodgson Burnett] 1849-1924) の *Sara Crewe, or What Happened at Miss Minchin's* (以下 *Sara*) は、1887年12月から1888年2月にかけて児童雑誌の *St. Nicholas Magazine* に連載され、同年にイギリスのフレデリック・ウォーン社とアメリカのチャールズ・スクリブナーズ・ソン社から単行本として出版された。時間をおき、イギリスとアメリカで演劇化されたことがヒントとなり、芝居の中で拡張された要素を取り入れて新たに書き直されたのが *A Little Princess: Being the Whole Story of Sara Crewe Now Told for the First Time* (1905) である (Resler 21)。

Sara の主人公は、インド育ちの少女セイラである。父親のクルー大佐は富豪で、母親を早くに亡くした一人娘を溺愛し、何不自由のない生活をさせ、本を与え、空想の遊びに付き合ってきた。セイラは学識があり、フランス人だった母親譲りのフランス語で知的素養を示し、本から得た空想力を身につけている。8歳のとき、本国での教育を受けるためにロンドンの寄宿学校のミンチン学院に入学するが、やがてクルー大佐が客死したこと

で小間使いの身分に落とされ、彼女を嫌うミンチンから虐待を受ける。苦境の中でも空想力で自尊心を保ち、友人のアーメンガードから本を借りて読み、空想力を助けとする。あるとき、お使いに出た先で硬貨を拾い、目の前のパン屋で6つのパンを買うが、高邁な道徳心で物乞いの少女に5つ施す。するとその晩、良い行いの見返りであるかのように屋根裏部屋が豪華に暖かく整えられ、おいしい食事も用意されている。それは、セイラを気の毒に思った隣家のインド帰りの紳士カリスフォード氏からの支援であるが、事実を知らないまま、迷い込んできたペットのサルを届けに隣家に行き、身の上を語ると、さらに偶然にもカリスフォードはクルー大佐の友人で、莫大な遺産を相続する女の子を探していたことが明かされる。セイラは見いだされ、カリスフォードの屋敷に移って、ミンチン学院とは縁を切り、幸せに暮らす。最後にセイラは、自分が経験した苦しみを思い起こし、ひもじい子どもが来たらセイラのお金で食べさせるという契約をパン屋と交わす。このとき、かつてセイラが助けた物乞いの少女アンがパン屋で奉公していることも明らかになる。

明治時代の女流作家として知られる若松賤子（〔本名 巖本甲子〕1864-1896）は、現在の福島県会津若松市に生まれ、親戚の家を経て横浜の大川家の養女となって（本田 441）7歳からメアリー・キダー（〔Mary E. Kidder〕1834-1910）の英語塾で学んだ。経済的事情での中断を経てキダーが新たに1874年に山手に移転させた寄宿学校のフェリス・セミナーに復学し、卒業後は母校で国語教師を勤めるかたわら執筆活動を始め、女性啓蒙雑誌の『女学雑誌』に寄稿し、主幹を務めていた巖本善治（1863-1942）と結婚した。

若松は、1893年から94年にかけて「セイラ、クルーの話。一名、ミンチン女塾の出来事。」（以下「セイラ」）というタイトルで *Sara* を翻訳し、7回に分けて雑誌『少年園』に連載した。それに先立って『女学雑誌』に1890年から92年にかけて掲載した「小公子」はバーネットの *Little Lord Fauntleroy*（1886）の忠実な翻訳で、

森田思軒の称揚する「敢て一字を増さず敢て一字を損せず」という文字どおり「謹勅に原文を摸」したとされる訳文は、時代の水準を超えたこなれた「言文一致体」と相俟って、この後も長らく親しまれることになる（高橋 233）

と評価されている。作中のオノマトペを抽出し、現代語訳と比較した研究でも

明治中期の言文一致体の先駆的な作品である若松賤子の『小公子』が、その同時代の他の作品よりも、現代日本語訳の坂崎訳に近似したものであり、本研究の前提としての「若松賤子の言文一致体が現代日本語の原点である」という仮説を支持する検証結果を得られた（クロス 14）

とされ、『小公子』は、現代の日本語の感覚に近い言文一致体でかつ、内容を精密に捉えた翻訳の原点となる作品の1つと見なされているといえる。

Little Lord Fauntleroy の次にバーネットが書いた *Sara* を若松が訳出したのは時系列として自然な流れであるが、そこに『小公子』と同様の緻密さはあったのだろうか。

セーラの目を通して描かれる人の心の微妙な変化や感情の起伏には、鋭敏な観察力を備えた作家のみに表現可能なリアリティーが備わっている。それは原作者バーネットの文筆の才に起因すると同時に、若松賤子の豊かな感受性、文章力による面も決して少なくなかった（川戸「若松賤子と初期の翻訳児童文学」288）

という指摘を踏まえ、本論では、「明治二十年代の翻訳としてはまれにみるような原文に忠実で正確な訳」（高橋 245）といわれる『小公子』への評価が「セイラ」でもあてはまるかを「削除」「付加」「書換」「言換」の各観点から検討する。底本は、挿絵等から「Charles Scribner's sons 社

版であると暫定的に考える」(種田 22) という考察に基づき、1888年のチャールズ・スクリブナーズ・ソン社版とし、『明治翻訳文学全集〈新聞雑誌編〉21 バーネット集』に収録された『少年園』連載時の「セイラ」との比較をおこなう。「前號正誤」(「セイラ」162)として若松自身の訂正が入っている箇所もあるが、初出時のままでの検討とする。

1. 翻訳の細緻性 - 削除

原作からの「削除」がおこなわれた文言は以下の下線部である。

<i>Sara Crewe</i>		セイラ、クルーの話。	
p.9	<u>Little Sara Crewe</u>	p.144	セイラは
p.10	who was all he had left to remind him of her <u>beautiful</u> mother,	p.144	いとしい亡き妻が唯一の忘れ形見
p.13	a clever, good-natured <u>little</u> French teacher	p.147	フランス語の教師で、才子風な、氣立の優しい婦人
p.13	I want her with me. <u>She is all I have</u> . She has stayed with me all the time since my papa died.	p.147	かふして一處に居るんです、此人形は、とうさまが死んでも、いつでも一處に居て呉れるんですもの。
p.14	twitched nervously, <u>but</u>	p.148	ピリくと引釣升た。鳩羽ねづみの眼は
p.17	Which was not at all polite, but was <u>painfully</u> true;	p.149	餘り禮儀に應つた申分では有まぜんかつたが、實際の〜とでした。
p.18	she turned <u>again</u>	p.150	といひ放つて、向ふをむき、
p.18	her strange, <u>small</u> figure	p.150	奇妙千万な後ろ影
p.18	some odd articles of furniture, sent up from <u>better rooms below</u> ,	p.150	其外つかひ古して、チグハグになつた、道具
p.19-20	her <u>odd habit</u> of fixing her eyes upon them	p.153	ヂット人を見詰める僻

p.20	slept <u>on the iron bedstead at night</u> ,	p.153	セイラと一處に物置に寐起をす る
p.21	old <u>red</u> footstool	p.154	古びた足疊
p.24	<u>containing stories of marquises and dukes who invariably fell in love with orange-girls and gypsies and servant-maids, and made them the proud brides of coronets</u>	p.159	手垢だらけな小説
p.25	“I hate it!” <u>replied Miss Ermen- garde St. John.</u>	p.160	「大 …………… 嫌ひ！」
p.28	the cook was malicious and hasty-tempered— <u>they all were stu- pid, and made her despise them,</u> and she desired to be as unlike them as possible.	p.164	お三は底意地のわるい上に疝癢持た、あゝいふ人たちには、なる丈、似ない様にし度と
p.31	wide <u>steel</u> grate here	p.167	大きい廣い暖爐
p.31	<u>raspberry</u> -jam	p.167	ジヤム
p.33	but I am a princess, <u>inside</u>	p.170	矢つ張り、貴い姫だ
p.35	Sara made a little bow. “Excuse me for laughing, if it was impolite,	p.172	笑つて失禮でしたら、御免下さい。
p.36	Miss Minchin <u>wished to</u> punish	p.174	ミンチン先生は罰といつて、
p.37	a little figure which was <u>not much more than</u> a bundle of rags	p.175	襤褸を縫ったのかと思ふほどの姿
p.38	more hungry <u>and faint</u>	p.176	いよくお腹が空いて來升た。
p.45	it was <u>a great deal</u> better than nothing.	p.181	兎に角、ないには増しでした。
p.45	the fires <u>in the houses</u>	p.181	暖爐の
p.46	they were <u>crowding about</u> the nursery window and looking out	p.182	子供部屋の窓から外面を眺めて、

p.46	<u>She called them the Montmorencys, when she did not call them the Large Family. The fat, fair baby with the lace cap was Ethelberta Beauchamp Montmorency; the next baby was Violet Cholmondely Montmorency; the little boy who could just stagger, and who had such round legs, was Sydney Cecil Vivian Montmorency; and then came Lilian Evangeline, Guy Clarence, Maud Marian, Rosalind Gladys, Veronica Eustacia, and Claude Harold Hector.</u>		
p.47	in the <u>East Indies</u>	p.182	インヂース島
p.48	in a <u>luxurious chair</u>	p.185	安樂椅子に
p.51	Sara went <u>downstairs</u> to the kitchen.	p.185	セイラは勝手へ行き升た。
p.51	“Here are the things,” <u>said Sara</u>	p.185	こゝへ置き升よ、買物を、
p.67	those who do the wrong—don’t intend it, and are not so bad. It may happen <u>through a mistake—a miscalculation</u> ; they may not be so bad.	p.200	悪るいゝとをする方が、悪るいとをする積りでないゝとかあるよ、さうして其人が強がちさほどな悪人ともいひ切れんものだよ。
p.68	Sara <u>kept</u> asking herself.	p.202	セイラは心の中に問を起こして、
p.69	which was <u>the real name</u> of the Indian Gentleman	p.203	天竺紳士、カリスフォード氏
p.70	which was a very easy matter, because, as I have said, <u>it was only a few feet away</u>	p.204	これは前申た通り、極無造作に出来ることでした。
p.72	her <u>motherly blue eyes</u>	p. 207	眼
p.73	And oh, <u>Charles, dear,</u>	p.208	あなた、

p.73	And there was no one of the many stories she was always being called upon to tell <u>in the nursery of the Large Family</u>	p.209	セイラが幾つか話す話のうちで、それほど度々話させられた話はなく
p.78	And she went and <u>sat on the stool</u> , and the <u>Indian Gentleman (he used to like her to call him that, too, sometimes,—in fact very often)</u> drew her small, <u>dark</u> head down upon his knee	p. 214	紳士の側へより升と、紳士はセイラの小さな頭を我膝の上に横にして、頻りに髪を撫て居り升た。

全体にバーネットの原文がほぼそのまま移し替えられ、*Sara* の 63, 668 ワードのうち、「セイラ」で削除されたのは 209 ワードで、99.7%の正確性である。訳されなかった部分は、フランス語能力の低さが「痛みをとまなうほどの」(“painfully” *Sara* 17) 事実であり、それをセイラに指摘されることが大きな一撃になるというミンチンの劣等感や、父親としてのクルー大佐の未熟さの部分で、こうした箇所を省略することで、大人の権威を保つ意図も見え隠れする。また、小説を読むことが娯楽と見なされ、のめりこむのは避けるべきと考えられていた時勢を背景に、低い階層の女中が好むセンセーショナルな小説をセイラが読む部分についても、例外的に具体的な描写が大きく省かれている。

2. 翻訳の細緻性 - 付加

若松が原作にない文言を「付加」したのは以下の下線部である。

<i>Sara Crewe</i>		セイラ、クルーの話。	
p.9	Her home was a large	p.143	其住宅は、 <u>東京でいふと、銀座通りの様な、大きな</u>
p.9	MISS MINCHIN'S SELECT SEMINARY FOR YOUNG LADIES	p.143	ミンチン女塾 <u>特に貴女の需に應ず</u>

p.14	So she looked at her <u>as severely as possible.</u>	p.147-8	<u>たゞ恐ろしく</u> 厳しい顔して見せて居り升た。
p.14	“You will have no time for dolls in future,” she said; “you will have to work	p.148	人形などを <u>捻くつて</u> 、 <u>遊んで</u> 居る暇はない、 <u>一處懸命</u> 勉強して、
p.18	the attic	p.150	四階の物置へ
p.19	practice	p.152	音楽の復習
p.22	she would rather not answer her friends,	p.155	<u>敵處</u> じやない、 <u>友だち</u> にも話すのが否のかも知れない
p.27	gave in	p.163	<u>書物</u> 貸借の約が、いよく調ひ升た。
p.28	who in the least deserved politeness.	p.164	鄭寧にしよふと思ひ升た。 <u>その考故</u> 、此時も、
p.34	How dare you think?	p.171	何を考へて居たんです？ <u>どふも</u> 怪しからん
p.35	she exclaimed,	p.172	<u>併し</u> 殊さらに、 <u>聲</u> を張りあげ、
p.39	Sara glance toward the buns	p.178	菓子パンを心有り氣に視て居る
p.45	her remaining bun	p.181	残ったパンは <u>たつた</u> 一ツでも
p.48	That evening, as she passed the windows	p.185	<u>パン屋</u> 一件の <u>あつた</u> 夕暮、 <u>隣り</u> の家の窓下を通ると
p.51	“Why didn’t you stay all night?” said the cook.	p.185	お三が、 <u>おまへさん</u> 、 <u>何だへ？</u> <u>今時分！</u> いつそ泊つて来れば好に、と冷かし升た
p.52	Then she turned the handle	p.186	<u>萎れ</u> かへつて、 <u>我身</u> を <u>啣</u> ちつゝ、 <u>とつて</u> 取手を握つて
p.53	when she left it,	p.187	<u>朝</u> 、 <u>部屋</u> を出る時
p.53	looked and looked.	p.187	<u>頻りに</u> 前なる <u>珍事</u> に見入り升た
p.53	she said. “It feels real—real.”	p.187-8	(と一々言葉に力を入れて <u>獨りごち</u>) <u>アレ</u> これア本當ら敷 ……… 本當だらう。
p.55	not at all like a real person,	p.190	<u>尋當</u> の人間で、さほど床敷ものが有らうと思へませんでした。
p.57	turn things into anything else	p.191	<u>見るもの</u> を思ふ様に變化する

p.57	it continued.	p.191 -2	善い事が直ぐと消失せはしない で、いつまでも續き升た。
p.58	stronger	p.192	空吹く風も身にこたへません かつた
p.68	Do I belong to somebody?	p.202	もしわたしは今までの様にひと りぼつちでなく、誰かのものだ といふのかしら?
p.74	with a book	p.209	大きな本を
p.76	thought of the garret	p.212	物置の躰裁を考へ

全体で 43,836 字の中の 215 字で、説明的意図以外ではセイラの強さとミンチン学院の大人の卑小さの対比に着目できる。料理人がセイラに固パンしかやらず、「いつそ泊って来れば好に」（「セイラ」185）と言う場面には「おまへさん、何だへ？今時分！」（185）という意地悪な台詞が足され、機嫌悪くセイラに八つ当たりする大人の冷たさが強調されている。セイラが自分を「プリンセス」（“princess” Sara 32）に見立てて、叱りつけてくるミンチンを笑う場面では「考へるなんて、何を考へてたといふに？コレ！」（「セイラ」171）という台詞の後に、「どふも怪しからん」（171）が加えられることで、高貴であろうとするセイラが自分を見下していることに気づいたミンチンの憤りが増幅されている。さらに、「少しも臆せる色かな」（171）いセイラに激高したミンチンが声を張り上げる場面では「併し殊さらに」（172）が加えられることで、惨めな境遇のはずのセイラと圧倒的権力を持っているはずのミンチンの心的立場が逆転し、セイラの強さとミンチンの動揺が際立つ。

逆に、屋根裏の奇跡を得たセイラが苦境を乗り越えていく描写では、「身にこたへませんかつた」（192）と希望が見える様子に「空吹く風も」（192）が加えられ、階下の世界での辛苦とそれに負けない気持ちが強調される。屋根裏が素晴らしく温かく整えられるようになったことへの喜びに対しては、現実には起きていないことなのか、とつぶやく前に「（と一々言葉に力を入れて獨りごち）」（187-8）と説明を入れている。少しの言葉を付加する

ことで、敵役との対立関係と、それに負けないセイラの内面の希望に心を寄せているといえるだろう。

3. 翻訳の細緻性 - 書換

原作の「書換」がおこなわれている部分は以下の通りである。

Sara Crewe		セイラ、クルーの話。	
p.9	By the time she was <u>twelve</u> ,	p.144	<u>十四才</u> の頃には
p.10	When she was <u>eight years old</u> ,	p.144	丁度 <u>十才</u> の時 <small>とう</small> で
p.10	her beautiful <u>mother</u> ,	p.144	いとしい亡き妻が
p.11	to <u>think little of</u> Miss Amelia Minchin,	p.145	セイラは此人も、 <u>何</u> だか好かない人だと思つて居り升た。
p.13	and had a <u>weird</u> , interesting little face,	p.147	<u>オゴミ</u> 惨味のある思ひつきな顔で、
p.13	very large, <u>green-gray eyes</u>	p.147	<u>はとばねづみ</u> 鳩羽鼠色の際だつて大きい眼
p.14	Sara kept the big <u>odd</u> eyes	p.148	セイラは例の大きな <u>つぶ</u> らかな目を見張つて、
p.14	You have no <u>friends</u> .	p.148	おまへは <u>みうち</u> 親類といふものは少しもないんです。
p.17	was not in the <u>least a clever</u> person.	p.149	一躰、 <u>不器用</u> な質の人間でした。
p.18	she <u>said</u> .	p.150	と尋ね升た。
p.18	You are to sleep in the attic next to <u>the cook</u> .	p.150	下女の寐る隣のところへ、これから寐るんです。
p.21	until <u>her own eyes would grow large</u> with something which was almost like fear,	p.154	我れながら氣味悪さ <small>みぶる</small> に身戦ひする <u>こと</u> が有升た。
p.23	She looked at the staring <u>glass</u> eyes	p.158	<u>アッケラカン</u> と當なし眼をして、
p.23	<u>After a while</u>	p.158	<u>直ぐ</u> に

p.24	There was a <u>sentimental</u> house- maid	p.159	女中の中で、 <u>小説好</u> なのが有つて、
p.26	And her eyes grew big and <u>queer</u> .	p.161	大きな眼が、 <u>うるんで</u> 居るかど、思ふ様でした。
p.26	she said <u>rather slowly</u> .	p.161	<u>どうやら</u> 不安心な調子に、
p.27	and <u>regard</u> her dramatic gesticulations,	p.163 -4	妙にキラツク眼光などを眺めて、 <u>たゞ</u> と呆氣にとられる外は有ませんでした。
p.31	she had beautiful <u>blonde</u> hair;	p.167	髪の毛の大層美ごとな方
p.31	<u>red-hot coal</u>	p.167	眞赤な火が堆高く、
p.32	which was a source of <u>great secret annoyance</u> to Miss Minchin	p.169	一種、 <u>異様な顔つき</u> で、
p.33	<u>exclaimed</u> Miss Minchin.	p.170	厳めしく、
p.34	<u>said</u> Miss Minchin	p.171	ミンチン女史がイキマケば、
p.34	<u>said</u> Sara,	p.171	セイラは <u>あと</u> をつぎ、
p.35	<u>breathlessly</u> .	p.172	呆れて、物がいへぬといふ鹽梅に、
p.37	a cheerful, stout, <u>motherly</u> woman,	p.175	極く氣の好ささうな、ポツチャリした、 <u>深切</u> ら敷女の
p.39	It may have been <u>there a week</u> .	p.177	何時から落ちてたこつたか、
p.46	and a King Charles spaniel;	p.182	<u>小犬</u>
p.46 47	all lived next door to <u>Miss Minchin</u> herself.	p.182	セイラの隣りに住んで、
p.51	Did you expect me to <u>keep it hot</u> for you?	p.186	おまへさん居ないつてお茶沸かして待つてられるもんか子？
p.61	Oh, you queer, poor, ugly, foreign little <u>thing!</u>	p.196	おまへはマア、何といふ妙な、みつともないお猿だらう！
p.72	the <u>Eton boy</u> who was the eldest,	p.207	大學に居る總領
p.73	the tired <u>princess</u>	p.208	躰
p.75	the <u>cleverest</u> and most brilliant of creatures	p.211	器用で、えらい人はない
p.76	his opinion <u>with much clearness and force</u> ;	p.212	<u>思ふ處</u> を存分に述べた

「書換」は、翻訳者の言語感覚や意図が大きく関わる改変である。年齢の変更は大きく、原作では8歳で入寮し12歳を過ぎているところ、翻訳では10歳で入寮し14歳を過ぎているので、より大人の女性に近づいたセイラ像が想像されている。年齢の原作では悲しい境遇に陥った子どもという側面が強いが、翻訳では命を切り開く若い女性の迫力が2歳分の年齢増で確保されている。セイラの目の色も大きな変更点で、「とても大きな緑灰色の目」(“very large, green-gray eyes” Sara 13)が「鳩羽鼠色はとばねづみの際だつて大きい眼」(「セイラ」147)となっている。鳩羽鼠色は「鳩の羽毛に見られるような鼠がかった藤色」(日本流行色協会 66)である。藤色も緑色も同様に目の色としては当時の日本の読者にはなじみがないが、鳩羽鼠が「明治から大正初期にかけて藤色とともに和服の地色として流行した」(66)色であることから、当世風の魅力を盛り込んだのかもしれない。他方で、セイラが読む本の中のマリー・アントワネットの「金髪」(“blonde” Sara 31)は、「美ごとな」(「セイラ」167)としているので、黒ではない髪の色は言及を避けた可能性がある。

原作で「言った」(“said” Sara 34)と簡単に述べられている部分は、ミンチンが「イキマケば」(「セイラ」171)、セイラが「あとをつぎ」(171)と二者の対立をより強調している。カーマイル家の長男を説明する「最年長のイートン校生」(“the Eton boy who was the eldest” Sara 72)は、イートン校がパブリックスクールであるにもかかわらず「大學に居る総領」(「セイラ」207)となっている。誤訳をした可能性と、複雑な学制の中で分かりやすくイメージさせるために「大学」とした可能性の両方が考えられる。

4. 翻訳の細緻性 - 言換

厳密な直訳ではないが、訳語の工夫により、原文の意味を伝え得ている「言換」の箇所は以下の通りである。

<i>Sara Crewe</i>		セイラ、クルーの話。	
p.10	the fact was that he was a <u>rash, innocent young</u> man,	p.144	併し父といふのがまだ若くつて、 経験のない人では有り、殊に深い 思慮もなく、氣樂な性質でしたから、
p.10	the most <u>fortunate</u> little girl could have	p.144	仕合せといはれる子供が持つもの
p.10	the polite <u>saleswomen</u> in the shops	p.144	呉服やの番頭
p.10	to <u>Lady Diana Sinclair</u>	p.144	何々様の姫さまへ
p.11	Her dresses were <u>silk and velvet</u>	p.144	上着の品をいへば、綾、羽二重、
p.11	her small undergarments were adorned with <u>real</u> lace,	p.145	下着の縁には、高價なレースを飾り升た。
p.11	with <u>old-fashioned</u> ways	p.145	當世向でない〜とが多つあり升た。
p.23	“You are nothing but a <u>doll</u> !”	p.158	おまへ、よくくの木偶の坊だ!
p.27	a story	p.163	小説
p.31	<u>suppose</u>	p.167	想像する〜と
p.32	as if the child scarcely heard the spiteful, insulting things said to her,	p.169	どの様な意地のわるい〜とをいはれても、馬鹿にされても、少しも氣にかけない者の様でしたから
p.36	by <u>pretending and “supposing,”</u>	p.174	例の妄想を心に浮べて、
p.38	<u>I’ve axed and axed.</u>	p.176	どこでも …………… いくら、臭んねいく。てつたか。
p.53	<u>Fairyland.</u>	p.187	屋氣樓に
p.54	It was like a <u>fairy story</u> come true—	p.188	殆ど昔し話しが實際になつた様で、
p.55	a sort of <u>Eastern magician</u>	p.190	老仙人の姿
p.57	It is exactly like something <u>fairy</u> come true,	p.191	丸で幻が實際になつた様だ子、
p.57	I am living in a <u>fairy story</u> !	p.191	丸で昔し話の中の人間になつた様だ。

p.57	I might be a <u>fairy</u> myself,	p.191	自分が魔法つかひで、
p.58	sense of <u>romance and mystery</u>	p.192	嬉敷秘密を抱いたもの
p.60	like a <u>fairy story</u> .	p.194	丸で仙境に遊ぶ者の如くなる
p.67	Sara had an <u>odd fancy</u>	p.200	半分はこわいのかと思たる様でした。
p.69	it seemed <u>that she had been living in a story even more than she had imagined</u> .	p.203	さうして、自分が想像した處でなく、實に小説家の人間で有つたことを悟りました。
p.70	Mr. Carrisford had been very <u>unhappy</u> .	p.203	實に不愉快な思をして
p.70	more <u>miserable</u>	p.204	いよく不愉快に
p.71	and an <u>odd fondness</u>	p.204	何となく、少女を可愛く思ひまして、
p.73	with the <u>short round legs</u> .	p.208	づんぐり肥えた小さい兒
p.73	<u>in the nursery of the Large Family</u>	p.208	子供たちに
p.73	<u>Large Family</u>	p.209	カーミケル家では
p.74	between <u>them</u>	p.210	カリスフォード氏とセイラとの間の
p.76	her <u>odd</u> looks.	p.212	寓意の顔色
p.77	her <u>guardian</u>	p.213	紳士は
p.78	<u>when one can't even pretend it away</u> .	p.213	どう考へ直しても
p.81	"I am <u>better</u> , thank you," said Sara, "and—and I am <u>happier</u> ,"	p.214	充分にして居るし、幸なんだから
p.82	the <u>wild</u> look	p.215	半狂亂の様な眼つき
p.82	<u>as if she could never look enough</u> .	p.215	眼を離さず一心に
p.82	<u>Mrs. Brown</u>	p.216	こゝのおかみさんは

“saleswoman” (Sara 10) を「番頭」(「セイラ」144)、実在のレディ・ダイアナ・シンクレア (“Lady Diana Sinclair” Sara 10) を「何々様の姫さま」(「セイラ」144)、“silk and velvet” (Sara 10) を「綾、羽二重」(「セイラ」144) など日本的な事物に置き換えている。あまり知られているとはいえない概念を伝えるときにも同化を試み、“suppose” (Sara 31, 36)

は「想像する」(「セイラ」167)「妄想」(174)、“Fairylnd” (Sara 53) は「蜃気楼」(「セイラ」187)、“a fairy story” (Sara 54) は「昔し話し」(「セイラ」188)「昔し話」(191)「仙境に遊ぶ」(194)、“fairy” (Sara 57) は「幻」(「セイラ」191)「魔法使ひ」(191)など、想像しやすい日本語をバラエティ豊かに考え、もともとは日本的ではない語の持つイメージを示そうとしている。また、下町訛りの強い浮浪児のアンの“I’ve axed and axed” (Sara 38) は、“I’ve asked and asked” が崩れた言い回しだが、若松が正しく意味を取りつつ、下層階級の話し方も重ねて「呉んねいく」(「セイラ」176)と訳したのは見事であり、翻訳者としての工夫と日本語力の高さが示されている。

おわりに

「セイラ」の翻訳について、川戸道明は「明治期の他の児童文学作品にはあまりみられないある種の精神性が備わって」(「バーネットと『小公女』」303) いると指摘し、作者のバーネットと

同様起伏に富んだ人生経験を有し、彼女同様豊かな文学的資質に恵まれた若松賤子が訳出したということには、それなりの意義を認めなければならぬだろう。賤子の優れた文学的センスなくしてこのような作品が翻訳の対象として選び出されることはありえなかったろうし、彼女のずば抜けた英語力・日本語表現力なくして、このような平易流麗な口語訳が生みだされることもなかったと思われるからである(304)

と評価している。川戸が認める「ずば抜けた英語力・日本語表現力」は、本論で検討してきた通り、「セイラ」の訳出でおこなわれた削除、付加、書換、言換の各要素から帰納できる。削除されたのは原文の0.3%に過ぎない。逆に、わずかに削除されたミンチンとクルー大佐に関わる重要な情

報からは、大人の弱点を示さないでおこうとする意図が感じられ、また、付加においては、セイラの境遇をめぐり、ミンチン女塾の冷淡さと隣家からの救いの手をセイラの主観から強調する文言が加えられている。35か所の書換では、日本文化になじみのない“fairy”や“fairyland”の訳出への真摯な取り組みがある。37か所の言換は、まさに原文の深い理解に基づく。

若松は、ヴァッサー大学の依頼により、1887年に日本の女性の教育の現状と自立手段について“The Condition of Women in Japan”(Shimada)にまとめ、経済的に自立できない日本女性の現状をまとめ、それを踏まえた上で家政や教育に女性の知性や経験を生かそうとした。主流に対して新興勢力が勝利した闘争の場がミンチン学院だとするなら、作者のバーネットと訳者の若松は、共に抑圧的な制度への転覆の意識を持ち、攪乱する若い力を称揚しているようにも見える。

セイラは一貫して奇妙な子どもであり、ミンチンにたてつき、学校の仲間にも辛らつな目を向ける。相手をじっと見て内面を探り出そうとするというふるまいはどこか無礼でもあり、容姿も「器量好しといふ兒では有ませんかつた」(「セイラ」147)とされる。しかし、若松は、大人におもねらず、かわいげのないセイラに寄り添う。セイラが獄中のマリー・アントワネットに思いをはせて強くあろうとする一方で、処刑後に人民が槍に首級を上げる場面に興奮する異様な場面も「あたし、あの方の^と思ふと、いつでも、首の躰へ着いてる處は見へないの、矛の先へ刺さつてる處しか見へないの。あんな猛く敷、狼の様な人たちが、其廻りで、躍つたり、叫んだりして居る處、それ計り眼につくんです」(167)と省略せずにその迫力を伝える。

若松が、運命に翻弄されつつも強く高邁な心と想像力を保ち、その精神性にふさわしい境遇を手に入れるセイラの強さに共感して訳出に工夫をこらしていたとしたら、「セイラ」の翻訳も『小公子』同様に「語るに値する作品を、より正確により美しく、しかも他者と自己の融即した地点に開花する己れの言葉で、語り伝える営み」(本田 440)だったといえるのだら

う。若松がセイラに因習を跳ね返す強さを見たことが訳出の起点にあるとすれば、「セイラ」が「当時のジェンダー規範に掉さす画期的な翻訳として再評価されるべき」（目黒 105）という指摘も踏まえ、本論で検討した翻訳上の工夫と女性意識の接続について、今後さらに考えていかななくてはならない。

<引用文献>

- Burnett, Frances Hodgson. *Little Lord Fauntleroy*. New York: Charles Scribner's Sons, 1886.
- . *A Little Princess: Being the Whole Story of Sara Crewe Now Told for the First Time*, New York: Charles Scribner's Sons, 1903.
- . *Sara Crewe, or What Happened at Miss Minchin's*. New York: Charles Scribner's Sons, 1888. <https://hdl.handle.net/2027/uc1.b4104286>.
- Resler, Johanna Elizabeth. "Sara's Transformation: A Textual Analysis of Frances Hodgson's *Sara Crewe* and *A Little Princess*." 2007. Indiana U, Master's Thesis.
- Shimada, Kashi. "The Condition of Women in Japan." 『若松賤子—不滅の生涯』 巖本記念会編、日報通信社、1995年6月、pp. 38-43。
- 川戸道昭「若松賤子と初期の翻訳児童文学——日本における近代児童文学の出発点——」『復刻版 明治の女流文学 翻訳編 第一巻 若松賤子集』 川戸道明・榊原貴教編、五月書房、2000年7月、pp. 273-290。
- . 「バーネットと『小公女』—若松賤子、藤井白雲子の翻訳との関係を中心に」川戸道昭・榊原貴教編『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》21 バーネット集』大空社、2000年10月、pp. 297-305。
- クロス尚美「言文一致体と現代日本語との関係性：翻訳『小公子』にみられるオノマトペ表現の比較を通して」『姫路獨協大学外国語学部紀要』27巻、2014年1月、pp. 1-16。
- 高橋修『明治の翻訳ディスクール—坪内逍遙・森田思軒・若松賤子』ひつじ書房、2015年2月。

種田和加子「風変わりな少女「小公女」の変遷：若松賤子から伊藤整まで」
『藤女子大学国文学雑誌』99号、2019年3月、pp. 21-37。

日本流行色協会監修『日本伝統色 色事典』日本色研事業、1984年4月。

本田和子「若松賤子解説」『日本児童文学大系 第二巻 若松賤子 森田
思軒 桜井鷗村集』本田和子・前田愛・岡保生編、ほるぷ出版、1977
年11月、pp. 435-452。

目黒強「若松賤子訳『セイラ、クルーの話。』にみるジェンダー」『国文論
叢』38号、2007年7月、pp. 97-107。

若松賤子訳「セイラ、クルーの話。一名、ミンチン女塾の出来事。」川戸
道昭・榊原貴教編『明治翻訳文学全集≪新聞雑誌編≫ 21 バーネット集』
大空社、2000年10月、pp. 143-216。

---. 「小公子」『女学雑誌』227号-299号、1890年8月-91年1月、1891
年5月-92年1月。

- ・一部の旧字を新字に改めた。
- ・本論の一部は、2021年10月16日にオンラインで開催された英語圏児童文学学会第51回研究大会での口頭発表「ミンチン学院で起きたこと—F. Burnett と若松賤子の試み—」をもとにしている。
- ・本研究はJSPS 科研費 21K00466 の助成を受けている。